ひまわりからのメッセージ

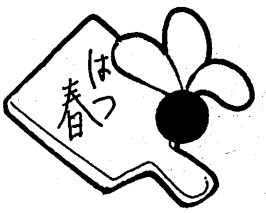
69号

2017.1.16.

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

体験してみて わかること



新しい年を迎え、それぞれに目標や抱負などおもちになっていることでしょう。来年度に向けて支援のひきつぎ会も始まるでしょうし、すでに私立中学や高校受験に向けて子どもたちの挑戦も始まっていることでしょう。

私は、新春早々、白内障の手術をしました。日帰り手術も多いようですが、緑内障もある私は、一泊入院となりました。手術自体は数分で終わり、特に問題はありませんでしたが、その後が大変でした。右目は、とてもよく見えるようになりましたが、視野が欠けている箇所は、より顕著になり、左目は裸眼0.02～0.03で、左右差が大きく距離感がつかめません。文字も、自分が思う様に書けず、まっすぐ書いているつもりなのに、どんどん斜めにずれていきます。

こうしてみると、子どもたちの中で視機能に困る子のことが実感としてわかってきます。もっとも子どもたちは、生まれた時から自分が見ている世界ですから、それが当り前だと思って生活しているのでしょうが、目が見えにくいということは、大変なことだと思います。

手術をしてみて、もう一つ分かったことは、見える色が違うのです。手術した目で見る世界は白色が鮮やかな白さです。一方、手術をしていない左の目には、クリームがかった色に見えています。不思議だなあと思います。

一昨年は背椎の圧迫骨折で車椅子を体験し、今回は、目の見えにくさを体験して、なる程、人の体というものは、うまくできているものだと感心させられています。そして、何でも体験してみないと、本当の大変さは分からないのだと改めて思い知りました。おそらく分かったふうなことを言っている私に、神さまが、体験させて下さって諭して下さったのでしょう。

今、「ひまわりからのメッセージ」を書きながら、今までのように万年筆が使えない、文字が整わないことを新しい発見だと思うようにしています。それにしても、子どもたちの見え方の問題をもっと真剣に考えていくべきだと改めて思いました。

私は、お医者様のご好意で、急遽左目の手術もしていただけることになったので、この不自由さから少しは解放されるのではと思います。外は大雪です。今も雪が降り続いています。

乳幼児期から続いている子どもの成長・発達

～西濃教頭会を終えて～

昨日、一月十三日に西濃教頭会でお話させていただく機会がありました。一時間十五分程の時間でしたが、私は、こんな機会をいただくことは今後はないだろうと思って、ちょっと欲張りすぎ、自分としては後悔の多い話になりました。そこでこの紙面で自分なりにまとめてみることにしました。

① 子どもの発達は、乳幼児期から始まる

私たちの脳が一番可塑性の高い時期は、乳児期です。様々な外界の刺激（ことばかけ、抱っこ、あそび等々）によって脳の中で神経回路ができ上がっていきます。でも必要ではないと、シナプスの刈り込みも行われていきます。（恐いことです……。）

核家族化が進み、人間が種としてもっている集団での子育てがなくなってきた今、赤ちゃんが周囲から受け取る刺激は極端に減ってきているといえます。スマホ片手に授乳なんてとんでもないことです。かわいい吾が子の発達を願うなら赤ちゃんと向き合ってことばかけをしていくべきでしょう。母子の愛着関係は、社会性の発達の基礎づくりになるのです。

幼児期は、子どもは遊びの中で育っていきます。障がいのない子どもたちは、自分で遊びを考え出し、発展させていきます。自主的に、主体的に外界との関係を形づくっていくでしょう。けれども、発達のどこかにつまずいている子どもたちは、遊びを発展させていくことが難しいので同じ遊びを繰り返したり、見たてることができないために、「ごっこ遊び」の輪の中に入れなかったりするのです。ことばの理解が遅かったり、ことばのやり取りが育ってなかった子どもたちは、園生活の中で様々なトラブルを起こしがちです。では、どうしていけばいいのでしょうか。私達が「早期発見」といって、チェック表などを使うと、「障がいの決めつけだ！」と言う人が必ず出てきます。そうではありません。子どもの全体的な発達をとらえるということは、誰でも容易ではありません。私も何十年も子ども達とかかわってきていますが、まだまだです。子どもたちは、自分がどこで困っているのかを上手く伝えられませんから、私たちがそこを早く見つけて、脳の可塑性の高い時期に少しでも意図的にかかわっていくことが大切になってくるのです。「受容」と言って、後をついて回っても支援とはいえません。

保健師さんや保育者、療育の人たちが子どもの発達をしっかり見極め、お母さんたちと一緒に子育てを考えていくことがとても大事です。「信頼関係を無くすから本当のことは言えません」。と言って、目の前の困っている子から逃げずに、大事な大事

な幼児期を無駄に過ごさないようにしましょう。

世の中は便利になり、文化的な生活、楽しいゲームの世界など十年前とは全く違ってきています。しかし、私たちの生活が便利になった分、子どもたちの体や心の発達は遅くなってきていると私は感じています。

② 小学校の生活の中で

さて、小学校へ入学した子どもたちは、園で「環境の整備」や「指示の出し方の工夫」や「表現する力」等々支援がされて入ってきていることが多いと思います。けれど、六歳を迎えた子どもたちが本当に六歳の発達をしているかと言うとそうではありません。それは、教室の後に掲示された子どもたちの絵を見ても明らかです。「まだ四歳の絵ですね」と言う絵がたくさんあります。教えられて描いている子もいますが、「自由に、好きな絵を描いてね」と言われて困る子もたくさんいるでしょう。

つまり、小学校一年生は、まだ幼いのです。「厳しくすればできます！」と言われるベテランの先生に出会うと、「幼児期の発達を学んで下さっていますか？」と、おたずねしたくなります。子ども達のことばの発達や表現方法など、今までに当然育っているはずだと思っていたことが上手くいかなかったら、少し前の発達は大丈夫なのか、今までの教え方で学べない子は、教え方を変えないと理解できないのではないかという視点が必要なのではないでしょうか。

視線の保持は？、ボディイメージは？、姿勢保持は？、目と手の協応は？、鉛筆や箸の持ち方は？、同時に二つのことができる？、聴覚的記銘力は？、視機能は？、言語的あるいは非言語的推理力は？、個人内差は？、新しい課題に対する反応は？、子ども達をよく観察していると、一人ひとりが何に困っているのかが見えてくるはずです。そうすれば、困っている要因も分析できるでしょう。特別支援教育というのは、まさにそういうことではないかと私は思っています。

一年生の段階で読み書き障がいを早く見つけて適切な指導をしていこうという試みも全国的には行われてきているようですから私たちも色々な情報を取り入れていくことも大事です。

一、二年生の時には教科書に絵や図もあり、先生方も子どもたちに出来る限り具体的に、また指示も入りやすいように配慮して下さいますから、学習面での困り感は少ないかもしれませんが中学年になると、困ってしまう子がでてきます。努力しているのにわからない、他の子より出来ない自分が分かってくる、叱られることも多くなった等々、三年生になって行動面で気になることが増えてくる背景には、学習の問題があるように思います。もちろん、すでに二次的な問題をおこしていて反抗挑戦性障がいとい

うような状況になっている場合もあると思いますが……。

そして、学習がわからないために奇声をあげたり、他の子にちょっかいを出したりする子がいると、他の子も面白がってクラス全体が落ち着かなくなってしまうこともあるでしょう。そんな時にその子を叱ってもうまくいかないことが多いものです。叱る時、私たちはどうしても感情的になって声を張り上げがちですが、そうなると子どもたちのペースにはまってしまいます。私たちが感情的にならないこと、普段の声のトーンを保つことも大事です。家庭での叱り方も同じですね。

子どもの中には、勉強もよくできて、すぐに反応してしまうし、他の子より何でも早くやってしまうために、クラスをかき乱してしまう子もいます。一人ひとりの子が、どの位集中して取り組めるのかを知っておくことで、許容範囲も違ってくるのではないでしょうか。

それから、学校での様子は、是非ご両親に聞いてもらうことだと思います。必要であれば、中立的な立場の者として、私のようなものを入れていただければ有難いと思います。家庭の中でルールがある場合でも、お母さん方は、子どもに敗けてしまって、つい子どもの家来のようになってしまわれることも多いように思います。お父さんに学校でのお子さんの様子を知ってもらうことは、お母さんの子育てを支えていくことにもつながっていくでしょう。

（高学年以降は次号で……）

〈私が心配している〝ことば〟のこと〉

子どもたちが知っていることば（語い）の数が減っていること、表現する力が弱くなっていることは以前から気になっていますが、私自身が使っていることばがすでにおかしいということに気づきました。ちまたには造語があふれ（グラブッてる？、カミってる？）孫のLINEから「いえーい」「あざーす」等といった意味不明の返事が返ってきていて「どういう意味？」と聞かなくては分からないことばが並んでいたりします。そういう私も「トラブってる」ということばを知らず知らずに使っていたりします。

日本語はどうなっていくのでしょうか。言語的推理の弱い孫は、私たちの会話を聞いて「どういうこと？」「どういう意味？」と絶えず質問してくるのですが、日本語が通じない子達はもっともっと増えてくるのかもしれません。

そして、手紙を書くということもなくなっていくのではないでしょうか。切手を知らない子どもたちや、大人になっても封書の宛名書きのバランスがうまくとれていない人などにも出会います。遠い将来には、人工頭脳に人間が支配されるなんてことにはならないでほしい等と思いつつ、ことばというものを、人と人との関わりを大切にしていきたいと強く思うのです。

〈お知らせ〉

二月例会は大野中学校主幹教諭で特別支援教育士の梅村卓司先生のお話を聞かせていただきます。